

V 研究活動－資料紹介・研究ノートなど－

1 秋葉区大野中遺跡出土の縄文時代遺物－阿賀野川低地に形成された遺跡の性格をめぐって－

(1) はじめに

旧紫雲寺潟の湖底下から発見された新発田市青田遺跡の調査を契機として、越後平野の深層に埋没する縄文時代遺跡の存在が次第に明らかになってきた。ここにとりあげる大野中遺跡もそうした事例の一つである。この遺跡は、新津丘陵と阿賀野川にはさまれた「阿賀野川低地」の一角に位置し、新津IC西地区開発事業に伴い2008年7月に行われた試掘調査で発見された。阿賀野川流域に分布する数少ない低地の縄文時代遺跡として重要であり、ここに概要を紹介するとともに、低地に形成された遺跡の性格について若干の検討を試みる。

(2) 遺跡の概要（図1）

試掘調査では、開発が予定される9.2haに1.5×3mあるいは2×4mの試掘坑を計61か所設定し、重機によって2.3～3.9mの深度まで掘り下げた。確認層序は計21層に及ぶ。このうちX層が古代、XIII層とXIV層が縄文時代の包含層である。XIII層は暗緑青～暗灰色の粘土もしくはシルト層、XIV層は緑灰～灰白色シルト層。炭化物を伴いながら、前者で中期前葉～後期前葉、後者で中期前葉～中葉の土器が出土した。XV層はXIII層に対応するとみられる粘土～シルト層である。XVI層～XIX層とともに未分解有機物を含む低湿地堆積層で、南端付近の15T XVIII層からクルミの核8点が出土した。この中には人為的に打割られた欠損個体が1例含まれる（図1右下）。

図1中段に試掘地と縄文時代遺物出土地の位置を示す。網かけ区域は、XV層～XIX層が分布する低湿地である。縄文時代の遺物は、調査地南端の9か所から出土した。包含レベルは標高3.8～4.4mである。この区域はXV層～XVIII層の分布域と重複しておらず、東西に連なる微高地上にあたることがうかがえる。微高地は西に向かって高くなり、遺跡範囲が西部へ広がることが確実である。なお、14Tの最下部XXI層（暗青灰色シルト）から縄文土器が1点出土した。調査時の所見では明確な判断を避けているが、XVIII層出土のクルミも含め何らかの活動を想定する必要があろう。

(3) 出土遺物

縄文土器391点・石器類2点・搬入礫9点が出土した。

A 縄文土器（図2）

中期前葉から後期前葉までの資料からなる。図2に有文土器11個体・縄文施文土器16個体・無文土器もしくは無文部4個体を示した。時期別にみた特徴と混和材のあり方を以下に述べる。

中期前葉 本遺跡の主体を占める土器群の一つである。いずれも北陸系土器の範疇に含まれ、異系列の土器は皆無である。竹管文の工具幅・文様構成・縄文原体に基づけば、中期前葉新段階もしくは最新段階に位置づけられる。3・7・8・25・29の平行沈線には、幅1cm以上の粗大な工具が使われる。7・29は口縁部文様帶の一部。爪形刺突を加える前者に対し、後者はこれを欠く点で後出要素をもつ。8は格子目文を充填する体部破片で、繊細な竹管工具による横位集合沈線上に縦位沈線を加える。6は単節縄文LRを施す小破片であるが、外傾した上半部と膨らみをもった下半部の器形から本時期の土器とみなされる。13・24は底面にスダレ状圧痕をもつ。13の体部には木目状撚糸文が施される。単軸に穿った一孔に縄Rを通し、左右同一方向に巻くもので、越後平野周辺では中期前葉終末まで残存する原体である。

中期中葉 この時期の土器とみなされる資料は、1・2に限られる。1は東北地方南部の大木8b式土器。キャラリバー器形をなし、口縁部文様帶の主文様となる隆線の両裾には沈線をなぞり引く。2は体部に最大径をもち、口端と体部に単沈線を施す。体部には単節縄文RLを施した後、1条ないし2条の縦位沈線を等間隔に配し、区画内に連続的な弧状沈線を描く。現時点では系統不明の土器である。

中期終末～後期前葉 中期前葉とともに本遺跡の主体を占める土器群である。11は口縁下に注口をもつ鉢形土器。注口部の周囲に沈線で区画した無文帶を設け、外部に繊細な単節縄文を施す。中期終末もしくは後期初頭とみられる資料である。12の器形もこれに類似し、不揃いな間隔で横位沈線を施す。18・30は刺突文を施す後期初頭の三十稻場式土器。30は蓋の縁辺部である。17・19はこれに後続する南三十稻場式土器の範疇に収まる。19は波状口縁の端部が肥厚し、頂部に円形の孔を配す。17は深鉢の体部で、単節縄文LRを施した後、ラフなタッチの単沈線を直線及び曲線的に加える。21・22は文様を欠くが、体部が膨らむ器形をもち、中期終末から後期前葉の土器とみられる。

混和材 遺物番号末尾に混和材区分と特徴的な含有物を示した。本遺跡の土器は、含有物に基づき3種に大別できる。I類は磨耗粒子を含む。新津丘陵の海成層を特徴づける堆積物であるが、阿賀野川や能代川の河川砂にも少なからず含まれる。本類は磨耗した石英・長石を含むIa類と磨耗岩石のみのIb類に二分できる。II類の含有物は、石英を主とする破碎粒子に限定される。阿賀野市から新発田市域の河川砂に類似するが、花崗岩を粉碎したケースも想定できる。本遺跡における三者の割合は、Ia類16%・Ib類61%・II類23%である。

混和材分類に続く記号は、○が角閃石・□が軽石・☆がガラス状粒子の含有量で、多量に含む資料を黒で表した。角閃石の含有率は74%に達し、38%の資料が多量に含有する。XIII層出土の10・13・14・21、XIV層出土の25・28・31は、微細な軽石片を含む。これらの土器には角閃石を多量に含む資料が多く、軽石内に存在する角閃石に由来する可能性が高い。ガラス状粒子は新津丘陵の海成層に堆積する高温石英もしくは黒曜石である。半数弱の土器に含まれるが、多量に含有する資料は4に限定される。

B 石器（図3-32・33）

狭義の石器は、図3-32に示す磨石1点のみである。磨耗範囲は全面に及ぶが、右主面（網トーン部分）と右側面が強度に磨耗する。角閃石が多量に混じる安山岩を石材とする。33は硅質流紋岩製の縦長剥片で、背面左（網トーン部分）に自然面を残す。

C 搬入礫（図3-34～41）

利器とは見なしがたい礫をこれとする。34～38は破損礫で、いずれも意図的に破碎されたものと考えられる。34・35は両極打法によって打ち割られる。角柱状をなした37は、側面方向から剥離される。36は節理に沿って割れるB面と節理面や礫面を打点としたC・D面からなる。39は被熱によって上端が赤化し（網トーン部分）、平面からの加熱で欠損する。石材は34～37が泥岩、38がアPLIT（半花崗岩）。39～41は完存礫である。39は石英斑岩の大形扁平礫。40・41は軽石で、前者は調査時に破損した。後者の片側平坦面（網トーン部分）は磨耗によって平滑化する。

（4）大野中遺跡の位置づけ

越後平野周辺に分布する沖積地下の縄文時代遺跡は、立地の上でいくつかの類型に分けられる。大野中遺跡は、寺崎裕助氏の区分〔寺崎2002〕に基づけば「沖積地埋没型」の典型例にあたる。新津丘陵を含む東山丘陵の周辺には、見附市から新潟市秋葉区にかけての沖積地に縄文時代中期の遺跡が点在する〔小熊2002〕。本遺跡はその

初期段階に形成が始まり、後期前葉に至るまで長期間にわたり断続的に営まれた稀なケースとなる。

この遺跡の性格を考える手がかりとなるのは、低地遺跡としてはまとまった量の土器と各種搬入礫である。大野中では石器の量がきわめて乏しく、周辺に分布する集落に付随したキャンプ地跡と考えるべきである。同時期に営まれた集落としては、半径2km圏内の秋葉遺跡〔前山2014〕、4km圏内の原遺跡〔前山2016〕と平遺跡〔川上・遠藤1982〕があげられる。原遺跡は後期後葉以降に中心があり、中期の遺物量は多くない。平遺跡は中期中葉～後葉土器が欠落する。これに対し、秋葉遺跡では本遺跡の下限となる後期前葉新段階の土器が未だ確認できない点を除けばよく似た変遷をとげている。

図1右上は土器の含有物を3遺跡で比較したグラフである。一見して明らかのように、大野中遺跡は混和材組成と角閃石の含有量が秋葉遺跡に近似し、本遺跡で使用された土器の多くが秋葉集落で製作された可能性を示唆する。秋葉遺跡との近縁関係は、土器の混和材となりうる搬入礫からもうかがえる。本遺跡と秋葉遺跡では、破碎石英を含有するII類の占有率が相対的に高い。これらの多くは意図的に粉碎した花崗岩とみられ、両遺跡の花崗岩に認める顕著な被熱は主として混和材の入手を意図したものであろう。本遺跡の土器から確認できた軽石片は、これまで指摘されていた混和材としての利用法〔立木2014〕を裏付けた。産地は阿賀野川上流域に求められる。搬入された軽石は、阿賀野川に面したキャンプ地遺跡ならではの資料と言える。大野中遺跡から出土した搬入礫は秋葉集落への供給を意図した物資の残余と考えられるが、本遺跡の形成や石材の移動に関与した集団の実態については、阿賀野川上流域に分布する遺跡群を含めた検討を通じて明らかにすべき課題となる。

本稿作成にあたり、搬入礫の石材と混和材の材質について竹之内耕・小笠原孝彦（フォッサマグナミュージアム）の両氏からご教示いただいた。お礼申し上げます。

（前山精明）

引用・参考文献

- 小熊博史 2002 「沖積地の遺跡（5）東山丘陵」『新潟考古』13 新潟県考古学会
 川上貞雄・遠藤浩司 1982 『平遺跡』 新潟市教育委員会
 立木宏明 2014 「細池寺道上遺跡の軽石製石製品について」『細池寺道上遺跡III 26次調査』 新潟市教育委員会
 寺崎裕助 2002 「新潟平野の遺跡」『新潟考古学談話会会報』第24号 新潟考古学談話会
 前山精明 2014 「秋葉遺跡第9・10次調査」『新潟市文化財センター年報』第1号
 前山精明 2016 「原遺跡第7・8次調査」『新潟市文化財センター年報』第3号

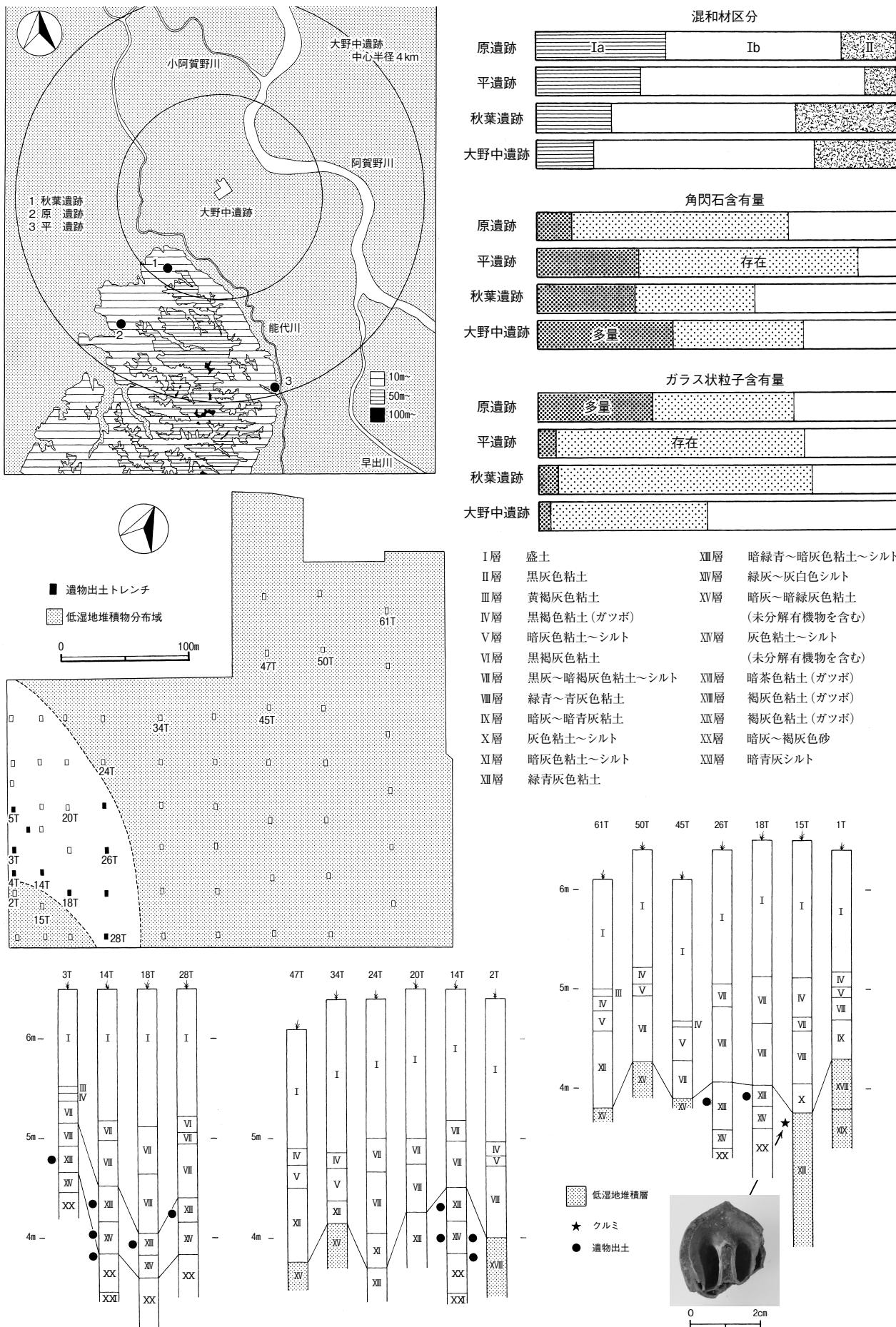


図1 遺跡の立地と土器の含有物



図2 繩文土器

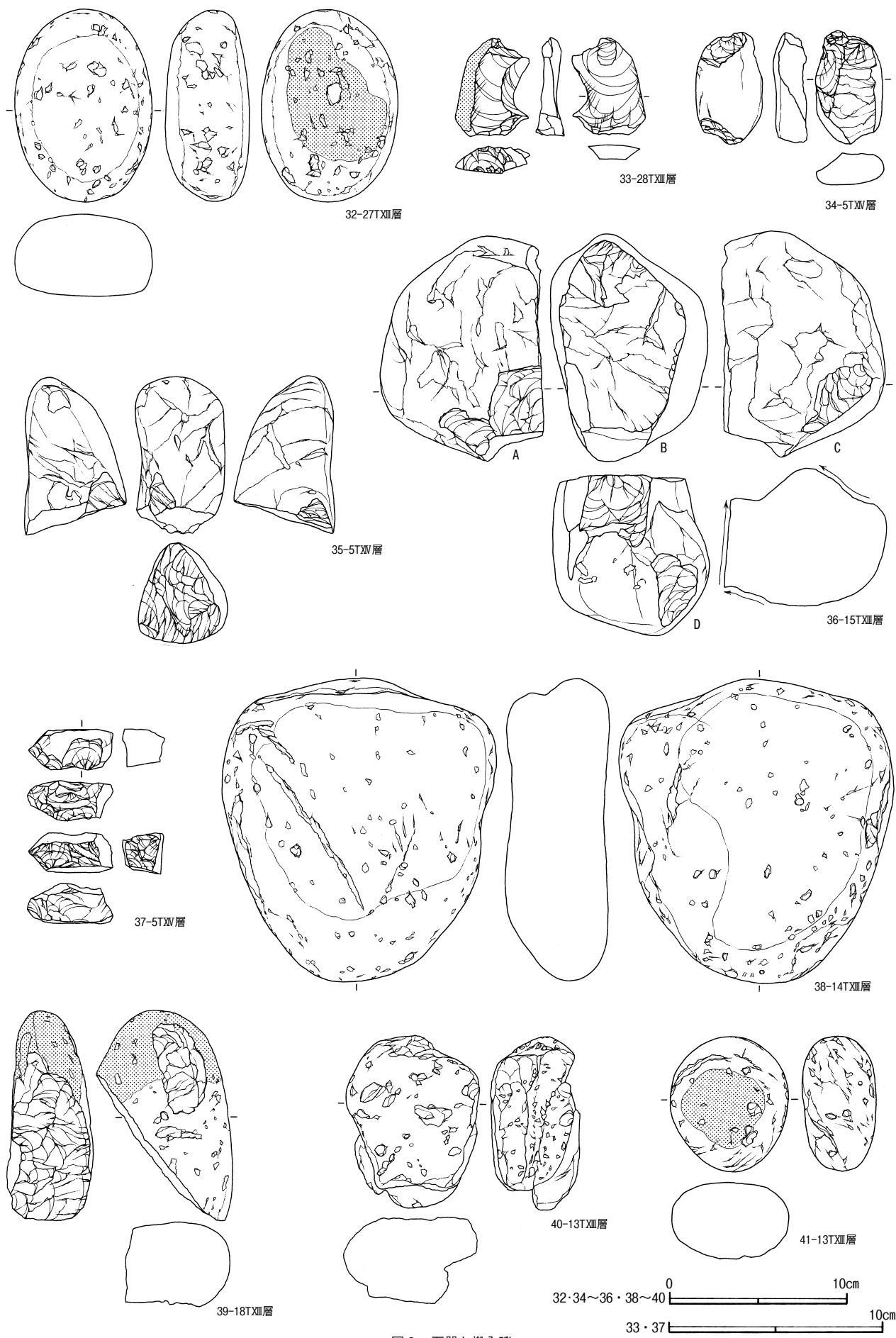


図3 石器と搬入礫